

平成 22年 5月 30日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19720079
 研究課題名(和文) 20世紀ロシア文化における戦争・日本人表象・女性表象のパラダイム
 研究課題名(英文) The Paradigm of the War and Representation of the Japanese people and Women in 20th century Russian Culture
 研究代表者
 溝渕 園子 (MIZOBUCHI SONOKO)
 熊本大学・文学部・准教授
 研究者番号：40332861

研究成果の概要(和文): 本研究は、ロシアのメディア文化において、日露戦争期と第一次世界大戦前後に、日本人表象や女性表象が、ロシア的オリエンタリズムとジェンダー規範の交差する地点で形象化されるパラダイムを明らかにしようとしたものである。書物や雑誌から得た情報から形成された異文化イメージが、実地見聞に基づく紀行文において変容し、それが活字メディアにより各々の文化に流通していくプロセスについて、日本とロシアの活字メディアを比較分析しつつ考察した。

研究成果の概要(英文): This study aimed to reveal the paradigm in which the representation of Japanese people and women (Russian and Japanese) was constructed. This construction is examined within the span of the Russo-Japanese War and the span of the First World War, and at the intersection of the Russian Orientalism and the prevailing gender norms within the Russian media over the time periods of the two respective wars. The examination involved the comparative analysis of several texts from the viewpoint of Russian and Japanese print media. The main finding was that the cultural images each country had of the other, and which were represented in books and magazines, were transformed in travel writings based on contact and practical experiences by novelists, and circulated by the print media.

交付決定額

(金額単位: 円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2007年度 | 600,000 | 0 | 600,000 |
| 2008年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 2009年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 1,600,000 | 300,000 | 1,900,000 |

研究分野：比較文学

科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論

キーワード：ロシア文化、戦争、日本人表象、女性表象、異文化

1. 研究開始当初の背景

本研究代表者は、1997年より、ロシアの日本近代文学翻訳・研究状況を調査し検討する中で、そこに潜む、単なる「親日感情」を超えた、日露関係の政治的・文化的力学を意識していた。

このことを明確にするために、2001年より、パワー・ポリティクスの視点から、ロシア近現代文学のテキストを取り上げ、日本人表象の分析を行い、ロシアの異文化に対するまなざしの理論化の試みを継続してきた。

その過程で、そこにあらわれる「サムライ」と「ゲイシャ」(あるいは「ムスメ」)が、西欧のオリエンタリズムを踏襲して形成されたモデルであることを確認した。

一方、西欧のオリエンタリズムのみに回収できない独自の要素も浮上し、事例研究を重ねた。

この結果、「サムライ」・「ゲイシャ」の誕生以前に、ゴンチャロフ『フリガート艦パラダ号』が、ロシア文化における日本人像のプロトタイプとなり、それが今日の文学作品や映画にも継承されていることが明らかになった。

とともに、日本人表象には、時代の要請に応じた変容が認められ、それは「戦争」を契機に最も顕著にあらわれるという特徴が見出された。

さらに、性差を超えた日本人表象のねじれた女性化の傾向も看取された。

本研究代表者の従来の研究は、「サムライ」・「ゲイシャ」という二つの異文化イメージ・モデルを、異文化の異質性を超克するための手段と見なし、それを基本軸として行ってきた。

以上をふまえ、この研究を継続的に発展させる形で、ロシア的なオリエンタリズムの正当化・強化の装置として軍事的に組み込まれる日本人表象を、戦時下でのロシア文化における女性表象の様相と関連づけつつ検証することにした。

2. 研究の目的

本研究では、戦争を素材とした20世紀ロシア文学(紀行文学を含む)や同時代の新聞メディアの言説を取り上げ、そこに見られる日本人表象の特徴を、ロシア人女性表象を参照しつつ明らかにすることにより、当時のロシア文化の異文化をめぐるパラダイムの一考察を試みる。

ここでは、特に、日本人表象の変容の大きな力学と考えられる日露戦争と第二次世界大戦という二つの戦争に着目する。

その当時に発表された、ないしそれらの戦争を舞台や主題とする、文学テキストや新聞

メディア、映画やポスターを素材に、そこに表象された日本人像を検証する。

その際、日本人表象を二つの性表象に区分けし、日本人男性表象と日本人女性表象それぞれについて、同時代の戦争を主題とするメディアに見られるロシア人女性表象の傾向と連動させつつ分析する。

オリエンタリズムの正当化・強化と男性本位の性規範の軍事化が、言説にも視覚的にも典型的にあらわれる戦争において、「日本人」と「ロシア人女性」各々に担わされた「男らしさ/女らしさ」が、いかに軍事的なものへと変換され構造的に組み込まれ大衆に消費されていったのかを考察する。

その上で、そこに潜む戦争・日本人表象・女性表象をめぐるロシア文化のパラダイムを問題化することが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

- (1) 20世紀の文学や言語メディアを素材に、戦争・日本人表象・女性表象を分析する。具体的には、戦争を主題ないし舞台とする文学テキストや、戦争期の雑誌メディアの言説から、日本人表象を抽出する。それらを二つ(発表時期が戦争中のもの、設定された主題や舞台が戦争のもの)に大別し、それぞれを分析しその特徴を明らかにする。その上で、日本人表象を男性表象と女性表象に分け、さらに表象分析を細分化する。それらの様相を明確にするとともに、それぞれを同時代のロシア人女性表象と連動させ、そこに見出される共通性と差異を検証する。
- (2) (1)の参照資料として、20世紀の雑誌メディアの画像を素材に、戦争・日本人表象・女性表象を抽出する。調査は、主に、国内のほか、ロシア国立図書館とその分館(新聞部)で行う。戦争中に発行された雑誌から、視覚的要素としての日本人表象を抽出する。その上で、日本人表象を男性表象と女性表象に分け、さらに表象分析を細分化する。それらの様相を明確にするとともに、それぞれを同時代のロシア人女性表象と連動させ、そこに見出される共通性と差異を検証する。
- (3) (1)および(2)により得られた成果を体系的にまとめる。それまで、活字メディア(文学テキスト、雑誌テキスト)と視覚メディア(雑誌のヴィジュアル・データ)というように、ジャンル別に行っていた考察を結合させ体系化し、異文化表象が軍事的に生成・編制される機構そのものすなわち時代の文化のパラダイムを明示化する方向

に発展させていく。そして、日露間の相互の文化表象が、両国関係の力学の変更を迫る契機となった日露戦争、およびそれに続く第一次世界大戦前後に、どのように変容していったかについて明確にし、考察を深める。

4. 研究成果

(1) [成果]

本研究代表者がすでに収集した日本人表象のデータ（V・ピークリ『オキヌさんの物語』、1980年など）をもとに、さらに戦争期前後に発表された20世紀のロシア文学テキストと雑誌テキストおよび視覚データから、日本人表象と女性表象のデータを調査・補充した。分析を進める中で、ゴンチャロフ『フリガート艦パラダ号』（邦訳『日本渡航記』）にあらわれる日本人表象をプロトタイプとしつつも、日露戦争によって両国間の力学に変化が生じた結果、日本人表象が場面や状況に応じて変容することがわかった。また、日露戦争期に顕著に見られる、こうしたコンテキストの変化に対応した日本人表象の可変現象が、その後の日本人表象の形成に影響を及ぼしていることも明らかになった。

の成果から、日本人表象は、置かれるコンテキストによって大きな変化が認められ、また、ロシア的オリエンタリズムが優先されるというパラダイムの中で、論理上の矛盾を孕んだまま、両義性（敵であり味方であること、など）が持たされるという知見を導き出した。そして、日露戦争期のロシアの報道における女性表象、特にヒロイン表象の分析結果と合わせることで、日本人表象は、男女の性差を問わず、ジェンダー規範下で構築されるロシア文化の女性表象をめぐるパラダイムとの間に、構造的類似性があるのではないかとの見解を得た。

をふまえ、日露戦争に関わるデータ収集と分析に取り組み、相互の文化的イメージを比較参照するため、またジェンダーの問題をより顕在化させるため、日本側の事例研究として、日露戦争期の少女雑誌におけるロシアのイメージ・モデルを検証するに至った。日露戦争期のロシアと日本において、日本および日本人表象、ロシアおよびロシア人表象、女性表象の分析をリンクさせることにより、異文化（他者）の形象化にあたり、いかなる規範が支配しているのかについて考察した。そして、国家間の政治的力学の強い支配

下で形成された異文化表象が、ジェンダーの問題と複雑に絡み合いつつ、軍事的に編制されていくことを具体的に示した。この成果の一部は、国内で実施された日露国際ワークショップ（熊本大学）において口頭発表および報告書への掲載の形で公表されている。

との関連で、より異文化形象化の問題への視野を広げるため、同時代的の日本において、ロシア表象の構築をめぐるパラダイムについてさらなる考察を行った。その際、日露戦争前後の日本で流行した「恐露病」に関する言説を取り上げ、異文化としてのロシア表象が、新聞報道から夏目漱石『それから』へと展開していった過程を検証した。また、こうした他者としての異文化を表象する際に用いられる「病」の比喻は、同時代のロシアにおいても同様に見られる現象であることを確認した。この派生的な研究成果については、論文「恐露病の想像力 『それから』における<ロシア>」（坂元昌樹・田中雄次・西槇偉・福澤清編『漱石と世界文学』、2009）にまとめている。

以上の成果を継承しつつ、日露戦争以後の日露関係に新たな展開が見られる、第一次世界大戦後を射程に入れた研究を行った。社会主義国家ソヴィエトの誕生は、日本において、それまでの日露戦争の戦敗国としてのロシア表象から、「進んだ」未来国家としてのそれへと変化を遂げる契機となったことを、文学テキストで確認した。

と同時に、第一次世界大戦後の好景気の影響を受け、外国への個人旅行が活発化した結果、それまで主に活字による情報から構築されていた日露相互の文化的イメージが、人やモノとの直接的な接触によって変容していったとの知見を、紀行文テキストの分析から導き出した。それは、ほぼ同時期に発表された紀行文である、ボリス・ピリニャーク『日本印象記』と宮本百合子『モスクワ印象記』との比較によって行った。双方のテキストに横たわる差異と共通性を抽出し、後者については、オリエンタリズムと関連づけながら考察した。それを、日露戦争前後の日本および日本人表象や、ロシアおよびロシア人表象と照らし合わせることで、そこに潜む連続性を浮上させた。この成果の一部は、論文「鏡のなかの日本とロシア 宮本百合子『モスクワ印象記』とボリス・ピリニャーク『日本印象記』の比較を中心に」として公表している。

(2) [研究上の意義]

視覚メディアでの異文化形象化のプロセスについての検証は途上にあるが、日露戦争後、第一次世界大戦から第二次世界大戦前までの日本やソ連の対外関係や社会状況において、それまでの書物による情報から形成された異文化イメージが、実地見聞に基づく紀行文においていかに変容し、それが活字メディアを通して各々の文化に流通していったかをめぐる考察に至ったことは、研究上の大きな意義であったと考えられる。本研究をさらに第二次世界大戦まで広げて展開していきたい。

本研究に関連する先行研究は、ロシア文化における日本人イメージ論の分野や、ロシア文化のジェンダー研究の分野に確認される。こうした蓄積をふまえて、戦争とオリエンタリズム、そしてジェンダーの視点を交差させ、紀行文を含めた文学テキストや雑誌テキストおよび画像を素材とした日露比較文化研究であるという点に、本研究の特色を認めることができると思われる。

(3) [位置づけと今後の課題]

本研究の位置は、従来の研究の中で個別に扱われてきたテーマを有機的に関連させる地点に立つところにある。

これを今後に向けて継続的に発展させることにより、異文化イメージ論やジェンダー研究の分野に、新たな知見と視座を提供する可能性が期待されよう。

言語・視覚文化における戦争・日本人表象・女性表象についての議論を、ロシア文化のパラダイム全般のそれへと敷衍していけば、エリア・スタディーズとしての発展性をも有するだろう。

こうした議論をポスト・コロニアルや他者表象の文脈一般と関係づけて行う場合、エリア・スタディーズのみならず、批評理論の枠組みとも関連すると考えられ、その意味で広く連動性を持つものとなるだろう。

本研究には、日露間の政治的・文化的力学も大きく反映される。そのため、本研究を文学研究や日露交渉史等の諸研究と連携させれば、今後ロシアの日本観や日本学全般、さらに異文化理解の議論へと発展しうることも考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

溝淵園子、鏡のなかの日本とロシア 宮本百合子『モスクワ印象記』とペリニャーク『日本印象記』の比較を中心に、日本教育研究年報、査読無、14号、2010、pp. 109 - 121

溝淵園子、宮本百合子「モスクワ印象記」における都市と記憶の語り、文学部論叢、査読有、第101号、2010、pp.197-210

溝淵園子、少女たちのロシア 明治期の雑誌を中心に、日仏露国際ワークショップ報告書「文化の翻訳/ 翻訳の文化」、査読無、2009、pp. 20 - 29

[学会発表](計1件)

溝淵園子、ロシアが見た『坊っちゃん』、日本比較文学会第71回全国大会ワークショップII「外国に<愛>された日本文学」2009年6月20日、大阪大学

[図書](計2件)

溝淵園子、恐露病の想像力 『それから』における<ロシア>、坂元昌樹・田中雄次・西楨偉・福澤清編『漱石と世界文学』2009、pp. 232-250

溝淵園子、ロシアが見た『坊っちゃん』、日本比較文学会編『海外における日本文学』、近日刊行予定 in press2010

6. 研究組織

(1) 研究代表者

溝淵 園子 (MIZOBUCHI SONOKO)
熊本大学・文学部・准教授
研究者番号：40332861